

國

語

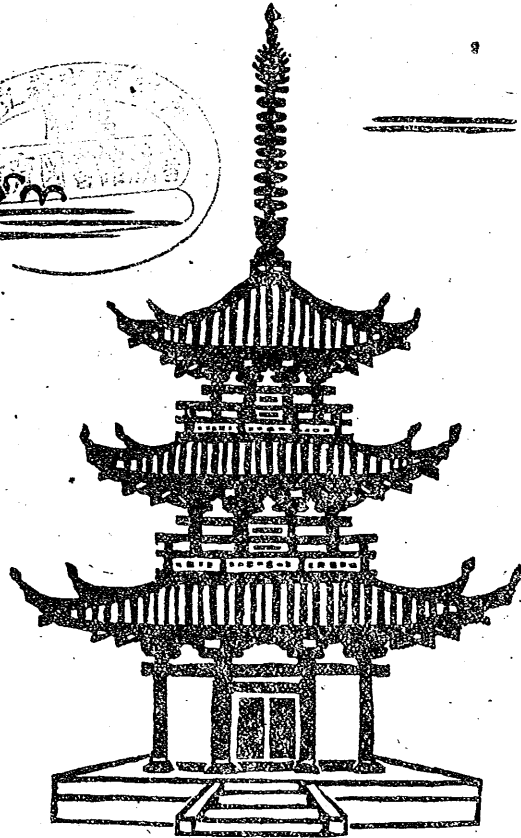


國

語

第四学年

上





もくろく

一 校門のかしの木 四

二 手ということば 十一

三 もんしろちょう 十六

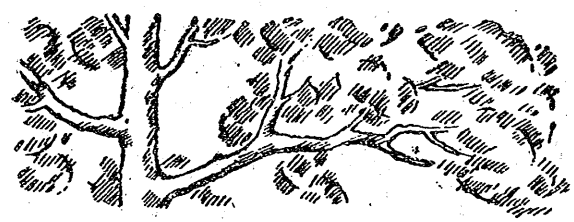
(二)

(三)

(四)

(五)

四 汽車の中 二十四



五 作文 四十七

(二)

(三)

(三)

六 月明かり 六十九

七 にげたらくだ 七十四

一の場面

二の場面

八 うさぎ日記 八十六



一 校門のかしの木



夜明けの風が流れてくる。中庭のキャベツが、なたねが、やぎ小屋が、ぼうっとあらわれる。どこかで小鳥が鳴いた。チチ、チチ、ピークイ、ピークイ、チチ、チチ。教室のまどは、まだねむりがふかい。

校門のかしの木は、目をさまして、しずかにしんこきゅうをした。

「さあ、きょう、いちばんはじめにくるのは、だれかな。」
かしの木は、子どもたちのことを、まず思いうかべる。

「あの白いブラウスの女の子かな。かばんをカチャカチャ鳴らして、走ってくる男の子かな。」

朝日の光がななめにさしてきた。校舎の半分が光った。校庭のつゆもいっぺんに光った。白いちやうが、ういたりしずんだりしながら、光の中をおよいでいたが、こんどは、思いきり高くとんで、屋根をこえて、うすべに色の空にきえた。

「きたきた。やっぱり、あの男の子だった。きょうは、ぼうしをかぶっているな。赤い運動ぼうだ。」

かばんをカチャカチャ鳴らして、げたばこのかげにかくれた。つきからつきへと、子どもたちがやってくる。学校じゅうは、いちどに花がさいたようだ。

あちこちのまどがあいて、教室も目がさめた。わらい声がはじける。オルガンがひびく。

カラン、カラン、カラン。おけいこがはじまった。

「はい。はい。はい。」

先生。先生。

えんどうの花が、風もないのにゆれている。

「もう帰る子がある。一年生だ。手をつないで校門をで



ていく子ども、かたを組んで話しながらでっていく子ども、ならったばかりの唱歌を、大きな声で歌っていく子ども、なんども手をふりながら、先生にさようならをして走って帰る子ども。



一どでいいから、風になりたい。風になったら、学校の中を、ちよつとひとまわりするのだ。ろうかをすうつと通ってみたり、かいたんをトントンあがってみたり、こうどろをのぞいてみたり、みんなが勉強する教室にはいって、こ

しかけてみたり――」

かしの木は、きょうもそんなことを考えた。

そうじがはじまった。渡りろうかをとおる足音がきこえる。バケツの音もする。水の音もする。学校のおいがしてくる。しおがひくように、子どもたちが、さっと、学校からいなくなってしまう。教室のまどは、どこもまぶたをどじる。すずめが、ときどき、チュンチュンと鳴く。その声が校庭にひびきわたる。

やぎが、つまらなそうに、夕やけの空をながめている。

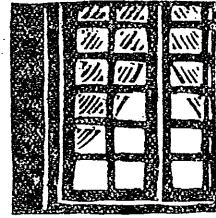
しゅくちよく室にひがともった。白いカーテンが黄色くみ

える。そこからラジオがきこえてくる。

星のちらばった青い夜空は、子どものクレヨン画と同じだ。「わたしをうえてくれた卒業生たちは、どこにどうしているだろう。もう、四十五年にもなる。あの日からきょうまで、わたしのみたこと、きいたことを話したら、いくつあるだろう。アラビアンナイトのように、いろいろな話がある。春には春の話、秋には秋のものがたり。なん百人の子ども、顔、なん千人の子ども、心。毎年、新しく入学した子どもたちが、わたしのそばへやってきた。毎年、新しい卒業生たちが、わたしのそばからさっていった。」

おぼろ月が空にかかっている。さくらの花が、白くうかん

でみえる。



「渡しもりは渡し船に子どもが乗ると、こっ
ちの岸から向こうの岸へ、船をこいでいく。
渡し終ると、またひき返して、新しい子ど
もを乗せ、向こう岸へ運ぶ。先生のおしご

とは、渡しもりのようなものだ。」

しゆくちよく室のひがきえた。夜つゆがおりてきた。

かしの木は、あくびを一つして、しめっぽくなった葉をふ
るわせ、それから、ねむりにおちていった。

二 手ということば



「手がよごれていますよ。」

「手がつけられません。」

「手がたりない。」

同じ「手」ということばにも、いろいろなつかい

かたがあります。

じょうずなできばえをみたとき、感心して、思わず手をた
たきます。

このときの「手」は、てのひらをさしています。「手をうつ」の「手」
も、「手をあわせる」の「手」も、これと同じつかいかたです。

ところが「かこの手とか、なべの手となると、人の手では
ありません。これは、持つところということになります。



また、「あさがおに手をやりましょう。」とい
うときの「手」は、またすこしちがいます。これ
は、あさがおのだしている手のことではあり
ません。あさがおのつるがまきつくように立
ててある、竹や木のことをいうのです。

「きゅうりの手や豆の手なども、同じです。

「手ならいをはじめましょう。」

「だいぶ手があがった。」

このときの「手」は、文字を書くことになっていますが、どう

して、「手」ということばが、文字を書くことになってきたので
しょう。

「手をつくす。」

「いますこし、手をいれてみよう。」

「新しく手をつけた。」

このようなときの「手」は、どんないみにつかわれているので
しょう。

それとよくにたつかいかたで、「まいの手」といたり、「この
手でやってみよう。」とかいたりします。

私どもの手が、さまざまなのはたらしきをするように、「手とい
うことばも、さまざまなのはたらしきをしてくれます。

つぎの「手」は、どんなつかいかたでしょうか。

「ゆく手に、まつの木が立っています。」

「すばらしいものを手にいれたね。」

「そんなに、手をやかせるな。」

「ちよつと、手にあまるしごとだな。」

「手にとるようによくわかる。」

同じことばで、ちがったつかいかたがあるのは、「手」だけではありません。

「腹がいたみだした。」

「腹をたてるな。」

「腹に思っていることと、いうこととが、ちがう人がある。」

「腹をかかえてわらった。」

「腹のすわった人だな。」

これは、「腹」ということばを、いろいろにつかったばあいを、しめしたものです。

「はなが高い。」はなをならす。

「口をだすな。」口ごたえする。

「はがゆい。」はがたたない。

私たちのからだの名まえに、このような、いろいろなつかいかたがあるのは、おもしろいではありませんか。

三 もんしろちょう

(一)

「ちょうちよ、ちょうちよ、なの葉にとまれ」の音楽が、ひびいてくる。

学校の運動場に、子どもたちが集まっている。

子ども「先生、早くでかけましょう。」

先生「じゃあ、でかけよう。はん長は、めいめいのはんのにんずをかぞえたかね。」

はん長「はい。はい。しらべました。」

はん長「先生、きょうは風がありませんから、ちょうちよが、

たくさんとんているでしう。」

先生「よくおぼえていたね。風のない日は、ちょうちよがよくでるのだったね。さあ、出発しう。」

「ちょうちよ、ちょうちよ、なの葉にとまれ」の唱歌が、きこえてくる。

(二)

女の子一「このまえより、なの花がへっているわ。」

女の子二「そうね。」

女の子一「なぜかしら。」

女の子三「花がちって、実がつきはじめたからでしう。」



女の子四 「先生、この実はなににするんですか。」

先生 「そんなに実をとっちゃいけない。よくみのってから、油をとるんだからね。てんぷらは、これであげるんだ。」

女の子一 「あら、そうですか。」

男の子二 「ああ、とんでる、とんでる。きょうは、ずいぶんとんでるなあ。」

先生 「あぶないよ。川に落ちないように。」

男の子三 「このまえきたときは、風が強かったから、ちょうちよがでなかったんですね。」

女の子二 「それに寒かったし。」

男の子一 「先生、風の日は、ちょうちよは、どこにかくれているんですか。」

先生 「しげった草むらの中に、かくれているのさ。」

子どもたちは、小さな橋を渡る。

男の子四 「先生、こっちの白い花のはたけは、なんのはたけですか。」

先生 「知っている人——」

子ども「はい。はい。」

先生「きしもとくん。」

きしも「はいこんばだけです。」

先生「そうだ。よく知っているね。」

きしも「私のうちでは、だいこんを、庭に二十本うえたんです。そのうち、たねをとるために、一本だけのこしておきましたら、それが、いまちょうど、こんな白い花をつけています。」

先生「それで知っているんだね。」

女の子三「あつ、白いちようちよがとんできた。」

男の子三「白いちようちよが、白い花にとまった。」

男の子四「あつ、こっちにも。」

女の子四「あっちにも。」

先生「どまっているちようちよが、どんなかつこうをして、みつをすうか、よくごらん。ひとりびとり、ばらばらにわかれて、そつとね。」

子ども「はい。」

(三)

きしもとくんの家。きしもとくんが、弟のはるおくと、

ふたりで、本をよんでいる。日曜日はれた朝。

はるお「にいちゃん。また、すずめがおりてきたよ。」

兄 「しずかにして、みていてごらん」

すずめは、びよんびよんとんで、庭のはたけの中を歩く。

兄 「すずめが、だいこんの葉をみているよ」

ささやくように、

はるお 「にいちちゃん、すずめはなにしにくるの」

すずめが、ぱつと、とんでにげる。

兄 「はるお、あまり大きな声をだすから、にげちゃったよ」

はるお 「ねえ、にいちちゃん。なにしにくるの」

兄 「あおむしをさがしにくるのさ」

はるお 「あおむしをとって、どうするの」

兄 「すずめにやるのさ」

はるお 「すずめ、あおむしをたべるの」

兄 「だいすきさ」

そのとき、おがあさんがおいでになる。

母 「なにしてるの。おさらいを早くすませてから、お遊びなさい」

兄 「おがあさん、あおむしのことを、話していたんですよ」

母 「そう、それも勉強ですね。あなたは、きょう、しいくびんのなっぱを、とりかえましたか」

兄 「あ、わすれていた。もう、おさらいがすんだから、あおむしのせわをしよう。はるお、だいこんの葉をいまいどってきてね。ぼくは、びんの中をそうじして、砂

に水をやるから。」

はるおは、だいこんの葉をとってくる。兄は、しいくびんの中の砂に水をやる。

はるお「はい、だいこんの葉——どうして、葉を砂の中に立てるの。」

兄「かれないようにさ。」

はるお「感心したように、『ふうん』。」

兄「さあ、あおむしくん、新しいごちそうだ。」

兄は、ニセンチほどに大きくなったあおむしを、新しい葉にうつす。

兄「ねえ、おかあさん。先生も、あおむしをかっていらっっしゃるって。」

母「あおむし、大きくなりましたね。たまごをとってしらべてから、なん日ほどたっているかしら。」

兄「ちよつとまってください。日記帳をみますから。」

日記帳をみながら、

兄「たまごから小さい虫になるのに、七日かかっています。それから十日すぎて、からだが黒っぽかったのが、青くかわってきたんですよ。」

母「ぼっぱと同じ色になったのね。どうして、はっぱと同じ色になるのか、わかりますか。」

兄「どうしてかしら。」

はるお「にいちちゃん、わからないのかい。」

兄「なまいきいうな、はるお。」

母「これこれ、そんなこと。ねえ、はっぱと同じになるの

は、鳥などに、すぐみつからないためですよ。」

兄「あ、そうか。」

(四)

それから、いく日かたったある日の午後。

はるお「にいちちゃん、にいちちゃん。」

兄「どうしたのさ。」

はるお「あおむしが、へんな色にかわっている。」

兄「ほんとうだ。おかあさん。黄色になっちゃった。」

母「さなぎになったのですよ。先生は、あおむしがさなぎになるって、教えてくださらなかったの。」

兄「いいえ、どうなるか、みんな自分でしらべるようにと、おっしゃっただけです。」

母「先生は、いいことをおっしゃいましたね。なんでも、自分でみつけていきましようね。」

はるお「さなぎをふしぎそうにみながら、「これ、死んでいるの。」

母「いいえ、生きていますよ。これからどうかわるでしようね。」

兄「観察日記に、さっそく、これを写生しておこう。」

(五)

きしもとくんが学校から帰ってくる。

兄 「おかあさん、ただいま。はるおは。」

母 「はるおは、さっきから、おもてて遊んでいますよ。」

兄 「おかあさん。」

母 「きょうね、國語の時間に、先生にほめられたの。」
兄 どうして。

「あおむしがさなぎになったところを書いたのが、よく
できたって。」

母 「それはよかったね。どんなふうに書いたの。」

兄 「よんでみましょうか。」

母 「よんでちょうだい。」

「自轉車のチューブのようにふわふわした、黒っぽい、
かわいいあおむしは、だいこんのはっぱと同じ色にか
わっていた。それは、すずめたちにたべられないため
だと、おかあさんが教えてくださった。ぼくは、あお
むしは、かくれみのをきているようなものだと思った。
ぼくは、学校から帰ると、だいこんのはっぱを、とり
かえてやるのが楽しんだ。きのう、学校から帰ってみ
ると、あおむしは、もう黄色なさなぎにかわっていた。」

弟が、ぼくよりさきに、それをみつけた。

そこへ、はるおが帰ってくる。

はるお「にいちちゃん、帰っていたの。まだかと思った。」

母「いま、いさんに日記をよんでもらっていたところよ。きょう、先生にほめられたんですって。」

はるお「いいな、にいちちゃん。」

兄「さあ、はるお、いっしょに遊ぼう。」

立ちあがりながら、なにげなく、しいくびんをみる。

兄「おやっ、おかあさん、おかあさん。」

大きな声をたてる。

母「どうしたんです。そんな大きな声をだしたりして。」

はるお「にいちちゃん、な

あに。」

兄「ちようになった、

ちようになった。」

はるお「ほんとうだね、

にいちちゃん。」

母「まあ、まあ。」

しずかな音楽がはじまる。

母「白いえのぐにみどり、をどかしたような、美しい羽です
こと。」

兄「あの羽をしぼったら、きれいなしるがでそうね。」



母

「おかあさんも、こんなところをみるのは、はじめてですよ。もんしろちようのおたんじょうね。」

兄

「羽をふるわせている。」

母

「空気にふれて、すこしずつのびるのね。」

なごやかな音楽がつづく。はるお、おかしな声で、

はるお「おや、ひげをはやしてる。」

兄

「ほんとう——ひげだね。」

はるお「あかんぼのくせに、ひげなんか。」

兄「ほんとうにきれいなね。おかあさん、花よりきれいなね。」

はるお「ふしぎだな。あんなあおむしが。」

兄「おかあさん、死ぬといけないから、ここからだして、

庭のだいこんの葉に、うつしてやりましようね。」

母

「それがいいわ。」

はるお「にいちちゃん、早くいこう。」

兄

「きつと、とびだすよ。さあ、はるお、おいで。」

兄弟ふたりが、いま生まれたばかりのちようちよを、しくびんからとりだす。庭には、日光が降りそそいでいる。

母は、ふたりの兄弟をながめている。

明かるい音楽。

四 汽車の中

(一)

汽車の中は 人でいっぱいでした。

「もうすこし、中へはいれませんか。」

「そんなにおしたって、だめですよ。」

むりにわりこもうとする男の人もあり、足をふまれて、おこっている女の人もありました。

私と弟のさぶろうは、乗るには乗ったものの、動くことさえできません。

私は、さぶろうの手をしっかりとにぎり、さぶろうは、私のからだにすがりついていました。それでも、汽車がゆれるたびに、前後からおされて、さぶろうは、だんだん頭を私によせ、おしまいには、私とさぶろうとは、まるで、一つからだになってしまいかと、思われるほどでした。

私は、ありったけの力をだして、さぶろうをかばうように両手をつっぱりました。

家をでるとき、おかあさんに、

「だいじょうぶです。おばさんのうちへは、もう二日もいったことがあるのですもの。それに、乗りかえもないし、二時間ほどでつくのですから。」

とうけあって、さぶろうをつれてきたのでした。

「もうすこし、中へ入れてくださいませんか。」

「だめだよ。とてもはいれないね。」

私は、ほんとうに困ってしまいました。

「さぶろうさん、もうすこし、がまんしていらっしゃい。」

私はそういつて、どうぞぶじにつきますようにと、心の中
でいのっていました。

「ここに子どもがいる。かわいいそうだ。」

頭の上で声がしました。すぐうしろのおばさんも、

「どうかして、中へ入れてやれませんかしら。」

と、心配そうにいました。

すると、なんだが、まわりがすこしゆるやかになり、から

だがらくになったような気がしました。私は、さぶろうのか
たに手をかけて、

「さぶろうさん、だいじょうぶ。」

ときいてみました。人ごみのうすぐらい中で、さぶろうは、
元氣よくにこっと、私をみあげました。

「だれかが、」

「頭はどうきょう、足はおおさか。」

といったので、みんながわっとわらいました。

そのとき、ふと上を向くと、私のよこのわかい男の人が、
ただひとり、わらいもせず、両方の手でまどわくをおして
います。私たちのために、せいっぱいの力で、すきまをさ

しらえてくれていたのです。私は、思わず、
「どうもありがとうございます。」
と、頭を下げました。

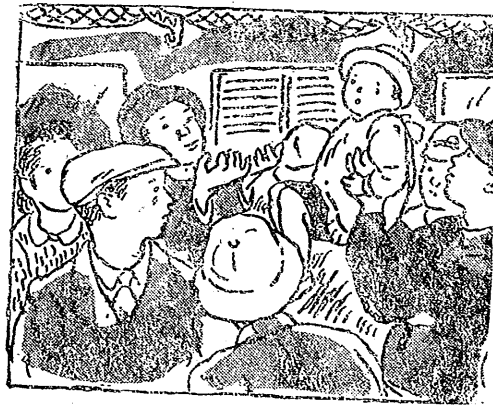
「さあ、いまのうちに、さきの方へいらっしゃい。」

うしろのおばさんがいつてくれましたので、私は、人とのあいだをかきわけていこうとしました。しかし、弟の手をひいてゐるので、ひとあしすすむにも、
よういではありません。

そのとき、そのわかい男の人が、
「さあ、リレーにしよう。」



といったかと思うと、いきなりさぶろうをだきあげ、となりのおじさんの目のまえへ、つきだしました。おじさんは、わらいながらさぶろうを受けとって、つぎの人に渡しました。それから、つぎからつぎへ、「よいしょ。」「よしきた。」「それっ。」と、送ってくれました。



はじめ、さぶろうは、足をちぢめて、心配そうに私の方をみていましたが、五人め、四人めと、高いところをメデシンボールのように送られていくうちに、
にこにこ顔になり、と

うとう、うれしそうに、声をたててわらいました。

乗客は、高いところを渡っていくさぶろうを、おもしろそうに、みおくらっていました。

私は、いそいで、さぶろうのあとを追いかけてました。

三郎は、だれかにゆずってもらった座席の上に立って、
「ねえさん、こっち。」

と、私を手まねきしています。

私は、さぶろうの方に近よりながら、車中の人たちに、心
の中でお礼をいいました。

(三)

私は、D D Tを、頭から、首すじから、せなかから、腹までふりまかれて、ちょうど、かふんにまみれたみつばちのようになつて、汽車でねむっていた。

ふいに、はくしゅがおこった。目をさますと、向こうの席にひとりの青年が立っていた。かれは、むねに、大きなぴかぴかしたアコードオンをだいて、ワルツの曲をひきはじめた。汽車は、かなり早く走っているので、青年のからだはゆれて、いたが、ひく手にくるいはなかった。かるやかなしらべは、朝の光のように氣持よく、車中のすみからすみまで流れた。

青年は、つづいて日本の子もりうたをひきはじめた。ごくありふれた曲であつたが、旅をしてきた私には、しみじみと

きかれた。

汽車はトンネルに
はいった。しかし、
青年は、ひく手をや
めないうで、いっしん
にひきつづけていた。
トンネルをでたと
き、向こうの席で、

「みなさん。」

と、大きな声をだした人があった。みると、しらがの老人で
ある。



「みなさん、たいへんさしでがましいことですが、わたしに
ちょっと話をさせてください。」

車中の人たちは、みんなこの老人をみた。

「わたしは、終戦後、いつも心さびしい旅をしていました。

けれども、きょうは、楽しい旅行をしています。どこの
どなたかはごんじませんが、楽しい音楽をきかせてくださ
る心持を、ほんとうにありがとうございます。はなはだです
ぎたことかもしれません。このかんしゃの氣持を、あら
わしたいとごんじます。みなさん、いかがでしょう。」

はくしゅが四方からおこった。

そこで、老人は、自分のかぶっていたぼうしを、そばの人

の手に渡した。ぼうしは、つぎつぎと人々の手を渡し、お金がその中にたまつた。私のまえにもぼうしがきた。私も喜んで、いくらかのお金をそれにくわえた。

車中をひとまわりすると、ぼうしは、ふたたび、しらがの老人のところにもどつた。老人は

「ごあいさつをします。」

と、青年のまえにすすみでた。

「たいへん失礼だと思ひますが、これは、車中の人たちのところざしであります。お受けとりください。」

青年はにっこりわらつた。

「みなさん、ありがとうございます。」

ここで、ちよつとことばを切つた。

でも、わたしは、こんなことになろうとは、思つていませんでした。また、こんなつもりでひいたのでもありません。ただ、たいくつまぎれにひいたのです。せつかくのおこころざしですが、このお金はいただきかねます。」

そういつてから、老人にぼうしを返した。それから、二三日のおし問答が、ふたりのあいだにとりかわされた。

おしまいに、青年は、大きな声で、
「では、ありがたくいただきます。」

と、おじぎをした。

「それでは、お礼にわたしのいちばんとくいな曲を、一曲ひ

きましよう。

これをきいて、みんなは、またはくしゅをした。青年は、アコードオンを、両手でぐっとひろげたかと思うと、しずかにひきはじめた。名高いオペラの序曲である。

私は、汽車のまどから、夕ぐれに近いそとをながめた。黄みがかった麦ばたけ、縣道らしい白っぽい道、そこを自轉車に乗って走る中学生、たがやしている父と子、きりの花――

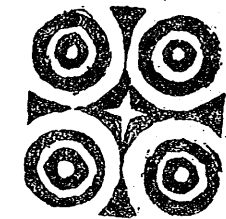
曲は終わった。ちょうど、汽車もどまった。青年は、すわって、アコードオンを黒ぬりのケースにおさめた。

駅は、東北本線の「はな」みであつた。駅の名も美しくよまれた。

五 作 文

(一)

思っていることを、はっきり書きあらわそうとすると、文章が、だんだんくわしくなつていきます。



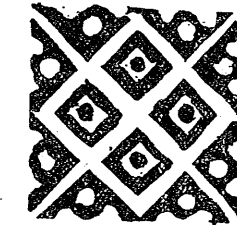
どこまで書きたしても、それでいいというところまでは、なかなか、いきつくものではありません。

文章は、心の鏡のようなものです。心ははっきりとしていますと、文章も、だんだんはっきりします。心がくもっていると、いくらなおしても、文章のくもりはとれません。

つぎに、ドッジボール大会という文章が、二へんあります。はじめに書いたのと、二回めに書いたのを、くらべてもらなさい。二回めのは、書きたしてあるだけ、よむ人、はつきりと、そのようすがわかります。

ドッジボール大会

六日の日、郡ぜんたいのドッジボール大会があった。



ぼくも、せんしゅになって、いっしょうけんめいにやった。

はじめに、ひがし村の学校とやった。ぼくのほうは、セ

ンターが外野へでてしまったので、あいてのセンターが、

「勝つ、勝つ。」

とさわいた。

それで、内野の人はいっしんになったので、かえって、ぼくたちのほうが勝ってしまった。

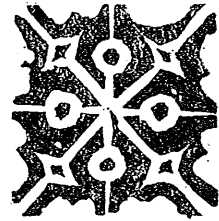
第二回めには、にし村の学校としあいをした。これも勝った。

さいごに、町の学校とやることになった。あぶなかったが、わずかのちがいで勝った。

ぼくは、うれしさいっぱいになった。

ドッジボール大会

いよいよ、ドッジボール大会がはじまった。
どの学校のせんしゅも、みんな、運動場に整
列して、式をあげた。



はじめに、ぼくの学校とひがし村の学校と
が、しあいをする事になった。ぼくたちは、コートへで
ていった。

たかやま先生が、

「しっかりやれ」

と、元氣づけてくださった。

「ピ」と、用意のふえが鳴った。

しんぱんの先生が、

「じゃんけんをして、いいほうのボールをつかいなさい。」
といわれた。

ぼくらのほうのボールをつかう事になった。ふえがま
た「ピ」と鳴って、しあいがはじまった。ぼくらのほうが
どんどんあてられて、センターまで、外野にでてしまった。
ぼくもあてられた。

ひがし村の学校のセンターが、喜んで、
「勝つ、勝つ。」

とさげんだ。ぼくは氣が氣ではない。みかたのおうえんだ
んが、「ブレー、ブレー」と、大声をたてる。のこったもの

がふんとうした。やがて、「ピ」と、ふえがひびいた。思いがけなく、ぼくたちの勝となった。

「場所こうたい。」

しんぼんの先生のあいずで、ぼくらは場所をこうたいした。すぐまた、しあいがはじまった。むちゅうでやっていると、「ピ」と鳴った。どちらが勝ったかと思つて、心配している、十一たい十で、ぼくらのほうが勝った。

うれしいような、すまないような氣持がした。

第二回めは、にし村の学校とやることになった。このときは、ぼくらのほうのボールが、よくあいてにあたつて、ちよつとのあいだに、勝つことができた。

こんどは、さいごの決勝戦だ。あいては、町の、いちばん強い学校だ。

たかやま先生が、

「さあ、こんどがだいじだ。みんな元氣でやるんだ。」
ど、はげましてくださった。

なんだが、向こうのせんしゅは、大きくて強そうだ。

「ピ」。はじまった。

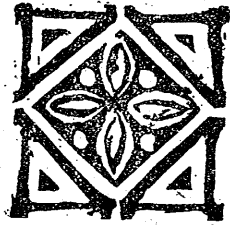
「じっかりやれ。」

おうえんの声が耳にひびいてくる。

センターが、外野のセンターにれんらくをとって、どんな、あてにあてた。あいてのセンターは、ぼくをねらっ

た。ボールがビュッとどんでんできた。ぼくは、しっかり受けとめて、すぐセンターに渡した。ボールは、すばやくあちこちにどんだ。そのたびに、「ワアッ」という声がおこった。ふいに、ボールが、ぼくのところにとんできた。ぼくはよこだきに受けとめた。あぶなくころびそうになった。「ピ」。はくしゅがおこった。ぼくたちの勝である。みんな、また運動場に集まって、終りの式をした。ぼくは、うれしくて、胸がときどきしていた。式をすませてもどってくると、たかやま先生も組の友だちも、みんな、ここにこしていた。

(三)



あります。

心にはっきりとえがかれた一つのかたちは、まじりけのない宝石のようなものでありますから、よけいなことは、ちりほどもあつてはなりません。

○ 五年生が、運動場で、たいそうをしています。

一年生の唱歌がきこえてきます。

○ つばきの花がまっかにさいています。

根もとに、ぼたぼた落ちています。

○ 海がみえます。

○ 家と家とのあいだに、ほそ長く光っています。

○ 明かるい月夜です。

○ そこらで、虫が鳴いています。

○ つむじ風が、わたしのまえを走っていく。

紙が、くるくるまいをしてとんでいる。

○ ろうかを曲がったら、

ふっと、風がふいてきた。

○ おかあさんの鏡

庭のはっぱがうつっている。

○ ほたるを三びき、つかまえました。



雨がはれて、にじが大きくなりました。

○ たんぼの上で、つばめがちゅう返りをした。

○ あさがおの花が、ラジオの音楽をきいています。

○ ほそい雲が、ますますほそくなる。

○ おかあさん、いま、柱時計がとまりました。

○ 黄色いやまぶきの花に、黄色いちょうがとまっています。

こんなのは、みじかくなった文ですが、まだ、みがきあげられたことばということはできません。つぎのはどうでしょう。

○ なにかの花びらが、

くもの巣にかかってゆれている。

○ 土の上、一センチほどのところで。

○ ボタンと音がして、

まりが、そこからとびこんできました。



よっちゃんたちの話し声がする。

○

考え考え歩きまわるような
大きなあり。

スリッパのへりをひとまわりして、
帰っていった。

○

よく落ちるかきの実。

いまに、一つもなくなるだろう。
またしても、ポトンと音がする。

○

さきだけみえることし竹が、
ざわざわと、動いている。

うす黒い雲は、どこかへいってしまったのに。

○

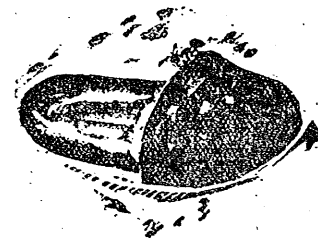
まよったせみが、かきの木につきあたって、
バタバタやって、にげていった。

○

ひとところで、からすが鳴くと、
あっちでもこっちでも鳴く。

こんなに、からすがいるのかしら。

○



すみすすっている。めじろの声がきこえている。

○ 雨が降る。風がふく。さくらの木が、ぬれてゆれている。

○ 四年生の楽しさよ。さくらの花をしらべてみたり――



○ どの花も、みんな空を向いている。日がたっている。

○ なの花ちらほらさきはじめ、うすぐもり。

○ 小さな虫がかたまつて、顔のところでとんでいくけれど、

○ ぱくちく花火が、パンパン、もうくらくらくなっている。

○ 豆のつるがまきついて、まきつくものがなくなった豆のつる。



○ 夏の風がふきこんで、新聞など動かして、ふきぬける。

○ しずかに波がよせている。みんな おべんとうをたべている。

○ ふえの音、虫の声、三日月さん。

○ 毎日書いてきたあさがお日記。はつ花のさいたこと、けさ書く。

○ いつのまにか、葉ばかりのさくらになって、毎日はれ。

○ 波の音がきこえている。子どもの声がきこえている。

○ あっちでもこっちでも、だっこ機、麦のとりいれ、日がてりつける。

○ どんどん、どんどん、うえていく。みんなそろって、うえていく。

○ もやのかかったおきの島、ボンボン船がでかけていく。

○ 雨あがりの麦のは、子どもと子どもにかけていく。

○ もみじがまっかで、山のいもをほっている人が二三人。

○ ふろからみてる十三夜さん。雲一つうかんでいる。

○ 青々とはれて、すすきすこしゆれている。

○ うら山に、みかんを持って遊びにきている。よい天気。

○ うめがさく。方々のうちで、ふとんぼしてある。

○ 炭を切る音も小鳥の声も、夕がたになっている。

(三)



人の顔をちようこくするのに、
二つのやりかたがあります。

一つは、はじめ骨組みをこしらえておいて、それにねんどでだんだん肉づけをし、しだいに、その人の顔にせていくやりかたです。

もう一つは、だいいせきや木材をけずって、だんだん、その人の顔ににせていくやりかたであります。まえのやりかたは、ちょうど、文章をくわしく書きたすのににっています。あとのやりかたは、文章をきりつめていくのと同じです。

やりかたはいろいろですが、ねらいどころは一つです。心に思ったことを、はっきりと写しだすということにほかなりません。



六 月明かり

たっぷりと、

春は、

小さな川にまで、

あふれている、

あふれている。



ぐれがたの庭そうじ
それがすむのをまっていたのが、
すぐうしろに、
月は、音もなく、のっそりとでていた。



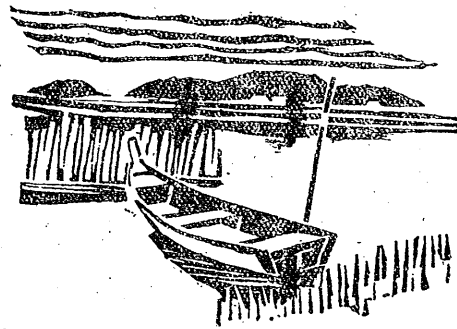
もやが深いから、
遠いような、
近いような、
月明かりだ。
なんの木の花だろう。



にわか雨は、
ぐっしょりとぬらした。
うまもうまかたも、同じように。



ぬまの上を、にわか雨が通る。
そのずっと高いところでは、
ひばりが一つ、さえずっている。





うまよ、

そんな大きなりをして、

子どものように、

からだまであらってもらっているのか。

あ、ほたるだ。



だあれもない。

うまが、

水のおいをかいている。



ぼさぼさのいけがきの上である。

ぼたんでもさいているのかと思ったら、

まあ、子どもが

わらっていたんだよ。



みんな

集まれ、

集まれ。

そうして、ぐるりとわをかけ。

いま、まっぴたつになるすいかだ。

七 にげたらくだ

一の場面

人 甲と乙、ほかに、ひとりの旅人。

ところ さばくの中。

甲乙ふたりが、あちこちをみまわしながら、なにか、ものをさがして歩いてくる。

甲 「どこへいったのだらうね。」

乙 「ちよつとのまに、いなくなってしまった。さて、どこへいったものかしら。」

ふたりそろって、遠くをみまわす。

甲 「砂のほかに、なにもみえない。」

乙 「木一本もみえない。」

「そこへ、ひとりの旅人がやってくる。」

旅人「もし、もし。」

甲乙が、いっしょにふり返って、

甲 乙「はいはい。なんですか。」

旅人「あなたがたは、なにかさがしておいでのようなだが」

甲 「そうです。」

乙 「さきほどから、さがしつづけているのですか。」

旅人 「もしや、あなたがたは、らくだをにがして、それをさがしていらっしゃるのではありませんか。」

ふたりは、びっくりした顔で、

甲 乙 「そうです。そうです。」

旅人は、おちついたことばつきで、

旅人 「そのらくだは、かた目ではありませんか。」

ふたりは、なおびっくりして、

甲 「まったくそのとおりです。」

乙 「かた目なんですよ。」

旅人は、思ひだすようなふうをして、

旅人 「そうして、左の足が一本短くて——それから——」

といつてから、ちよつと考える。

このようすを、甲乙ふたりがみてとって、なにか、こそこそささやきあう。

旅人 「そうそう、そのらくだは、まえ歯が二三本ぬけてはいませんか。」

ふたりは、いよいよびっくりして、

乙 「それにちがいません。」

甲 「どこでみましたか。」

旅人は、それには答えなくて、また思ひだしながら、

旅人「それから、つけた荷がありましたね。」

甲乙「ありました。」

旅人「その荷は麦でしょう。」

甲「たしかに、たしかにそうです。」

乙「どこにいるか、早く教えてください。」

旅人「いや、わたしは、そのらくだをみたのではありません。」

甲「え、でも、そんなにくわしくごぞんじではありませんか。」

乙「それとも、だれかにおききになったのですか。」

旅人「いいえ、みたのでも、きいたのでもありません。」

ふたりは、また顔をみあわせていたが、

甲「どうもおかしい。あなたは、そのらくだを、どこかへ

つれていったのにそういない。」

旅人「おどろく。」

乙「あやしい。さあ、けいさつしょへ、いっしょにいったらいい。」

旅人「そんな。」

甲乙「いや、あちらで、あかしをたててもらおう。」

ふたりは、旅人の両手をとる。むりにつれていく。

二の場面

人 旅人。甲乙。裁判官。

ところ 法廷。

旅人と甲乙が、ならんでいる。裁判官がはいってくる。

裁判官「いったい、どういふことなのか、くわしく話さない。」

甲「私も、麦をつけたらくだをつれて、さばくを通っていましたが、とちゅうでひと休みしているうちに、つい、ねむってしまいました。」

裁判官「それで、どうした。」

乙「目がさめてみると、らくだがいません。おどろいて、方々をさがして歩きましたが、みあたりません。そのとき、この人にてあったのです。」

裁判官「それから。」

甲「すると、向こうから、らくだをにがしたのではないか。」

と、たずねるのでございます。

乙「それに、もっとあやしいことは、この人は、私どものらくだのことについて、それはよく知っております。」

裁判官「どんなことを、知っているのかね。」

乙「たいいち、らくだがかた目であることを知っていました。そのとおり、私どものらくだは、かた目でございます。」

甲「らくだがびつこであることも知っていました。しかも、左の足の短いことを、ちゃんと知っているのです。」

裁判官「ほかにまだ、知っていたかね。」

乙「はい、知っていました。らくだのまえ歯が、二三本ぬ

けていることまで。」

甲 「そのうえ、つけていた荷物の品まで、知っているじゃありませんか。」

甲 乙 「らくだをぬすんだのは、この男にちがいありません。」

どうぞ、おさばきをお願いします。」

裁判官 「ふたりのいうことは、よくわかった。」

旅人をみて、

裁判官 「なにか、そちらにも、いいぶんがあるかね。もしあるなら、ここで、はっきりいうがいい。」

旅人 「はい、申しあげます。私がさばくを旅していますと、砂の上にくだの足あとがつづいていました。それな

のに人の足あとがみえません。それで、このらくだは

どこかからにげてきたのではないかと、思ったのです。」

裁判官 「なるほど。それから、そのらくだがかた目だというこ

とは、どうしてわかったのかね。」

旅人 「それは、こうです。道のかたがわの草ばかりたべてあったからです。」

裁判官 「なるほど。して、びつこということは。」

旅人 「それは、かた方の足あとが、一つおきにあさくなってい

ましたので。」
裁判官 「では、まえ歯のぬけているということは、なぜわかつたのか。」

旅人「草をくいつたあとをみますと、かみきれないで、こっている葉がありました。それで、齒が二三本ぬけているにちがいないと、考えました。」

裁判官「きいてみれば、いちいち、もつともなことばかり。」

甲「もしもし、それなら、荷物をつけていることが、どうしてわかったのでしょうか。」

乙「そうです。それが麦だということが、なぜわかったのでしょうか。裁判官どの、それを、しらべていただきます。」

裁判官「それについて、なにか。」

旅人「それはほかでもありません。道に、麦がこぼれていた

からです。」

裁判官「よしよし、よくわかった。らくだは、あなたがぬすんだのではない。もう帰ってもよろしい。」

旅人は、うれしそうに立ちあがる。裁判官は、ふたりのものに向かつて、

裁判官「あなたがたふたりが、あの旅人をうたがったのも、むりはない。けれども、いまの答で、知っていたわけがはっきりしたでしょう。もう、うたがいははれたことと思う。早くいってらくだをさがしなさい。あまり遠くへいかないうちに。」

甲乙ふたり、いそいでたちさる。

ハ うさぎ日記

4 月 28 日 (土) 晴 19 度

私たちは、うさぎをかうことになりました。先生が、黒いうさぎと、白いうさぎと、茶色のうさぎを、かごにいれて持ってきていっしょにいました。私たちで、めかたを計りました。

黒うさぎ 390g. 白うさぎ 400g. 茶うさぎ 1kg.

4 月 29 日 (日) 晴 20 度

草をやったら、3びきとも、せつせとたべました。

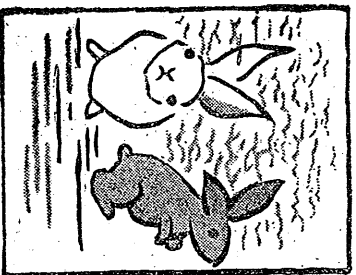
うさぎはどんな草を、いちばん喜んでたべるか、しらべてみることにしました。きょうは、れんげそうとなたねの葉をやりました。

4 月 30 日 (月) 晴 19 度

うさぎは、すこしもじっとしていません。いつも、どこかを動かしています。

5 月 1 日 (火) くもり 19 度

うさぎは、にんじんを、とても喜んでたべました。



5月5日 (土) 雨 15度

にんじんとじゃがいもをやったら、黒と白が、けんかをし
てたべました。

5月6日 (日) 雨のち晴 15度

はこべどおおはこをやったら、にんじんをやったときのよ
うに、喜んでたべました。

5月20日 (日) くもり 18度

うさぎは、新しい草をいれてやると、そればかりたべて、
まえにたべのこした古い草は、ふみつけるだけで、ちっとも

たべません。

5月22日 (火) くもり 16度

うさぎは、みんなで、13びきにな	茶うさぎ	1びき
りました。白うさぎが9ひきと、黒	白うさぎ	10びき
うさぎを1びきもらいました。	黒うさぎ	2ひき

5月28日 (月) 晴 23度

よく晴れた日には、とても元氣があります。うさぎでも、
くもった日や雨降りの日は、きれいなのでしょう。

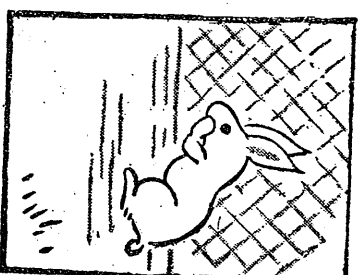
5月29日 (火) くもり 24度

よくみていたら、ねこが顔をあらうように、うさぎも、まえ足で、耳や顔をなでていました。

5月31日 (木) 晴 28度



うさぎがうしろ足で立ちました。が、すぐ、まえ足をおろしてしまいました。



6月25日 (月) 晴 27度

うさぎのふんを、水の中へいれてみたら

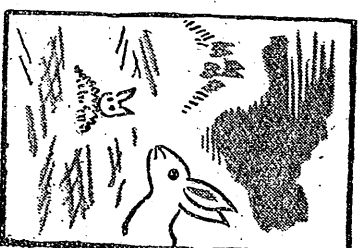
うきました。うさぎのふんはまんまるです。

6月28日 (木) 雨 28度

このごろは天気がわるいので、うさぎは、元氣がありません。なるべく、こくろいをやるようにして、ぬれた草はやらないうちに注意しています。

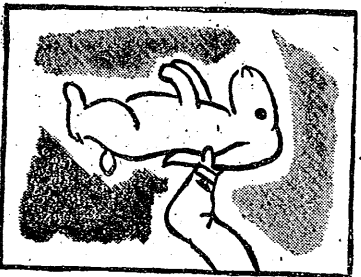
7月9日 (月) 晴 26度

私が麦をやったら、白いうさぎは、早くたべたのか、黒いうさぎの上に乗って、たべました。



7月20日 (金) 雨のちくもり 22度

うさぎ小屋のそうじをしました。小屋からだすとき、みんな喜んですべりましたが、1匹きの白いうさぎと、茶色のうさぎは、おくへはいってこないのて、小屋へ頭をいれて、だきあげて、そとへだしました。だすときに、わらを足でけったりして、あばれました。



7月24日 (火) くもり 19度

うさぎの毛の長さを計ってみたら、白は2cm、黒も2cm、茶は1.5cmでした。そうじをしようと思って、首のところ

を持って、かごの中へいれたら、キューと、高く鳴きました。

8月2日 (木) くもりのち晴 29度

朝、いってみたら、右から四ばんめのへやに、子うさぎが4ひき生まれていました。

8月4日 (土) くもり 25度

茶色のうさぎがはいっているへやに、えさがなかったのて、かごいの鉄ぼうを、かじっていました。

子うさぎの生まれた、右から四ばんめのへやに、黒い小さな虫が、たくさんいました。

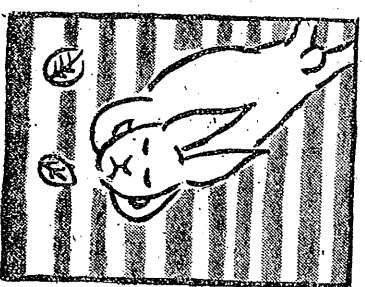
9月3日 (月) くもり 25度

けさ、白うさぎは耳にけがをしました。ほかのうさぎが
んだのです。しばらく動かないで、いたそうにいました。

9月6日 (木) くもりのち晴 29度

お晝に、うさぎのどころへいってみたら、
暑いのてねむっていました。あと足を長く
のばして、まえ足を胸の下にいれていまし
た。

10月23日 (火) 雨 20度



うさぎのせなかをさかさになると、毛がふわふわとび
ます。寒くなったので、むしろて戸をこしらえてやりました。



11月11日 (日) 晴 19度

けさ、いってみたら、左がわの
へやに、毛がたくさんぬけていま
した。よくみると、おくの方に、
わらが巢のようにふくらんでいて、

その中に、わたのようなふわふわした毛が、いっぱいはい
ていました。その毛にくるまって、うさぎの子が7ひきいま
した。1ひきは白で、あどのは黒っぽい色をしていました。

11月13日 (火) 晴 12度

7ひきの生まれたばかりの子うさぎは、わらの中の毛の中で、元氣に動いています。1ひきのこらず、じょうぶにそだてたいと思います。

11月22日 (木) くもり 17度

7ひきの子うさぎのうち、5ひきはねずみ色、1ひきは白、もう1ひきは黒でした。ねずみ色の4ひきは、生まれてから、12日めのきょう、みんな、目があき、からだには、すっかり毛がはえました。

11月25日 (日) 晴のちくもり 17度

白の子うさぎは、親について、はじめて、巣からはい出してきました。草のそばに来て、口をくっつけましたが、草はたべませんでした。

11月26日 (月) 晴 19度

ねずみ色の子うさぎが、きょうは、巣からでて歩いていました。そうして、にんじんのやわらかそうな葉を、たべていました。黒の子うさぎが、ちちをのもうとして、親うさぎのちちにすがりつきますと、親うさぎは、足でけって、のませませんでした。うさぎは、人がみていると、ちちをのませた

くないのでしょうか。

11月29日 (木) 雨 13度

朝早 (いってみたら、子うさぎは巣の中でねていて、親うさぎだけが、草をたべていました。お晝ごろみたら、子うさぎは、7ひきども、巣からでて歩いていました。

12月1日 (土) 晴 13度

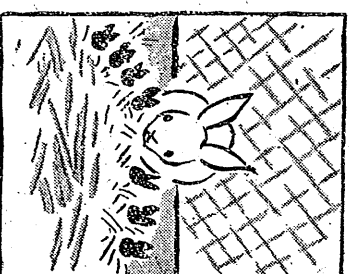
子うさぎが生まれてから、きょうで20日めです。子うさぎと母うさぎのめかたを計ってみました。母うさぎは4kg、子うさぎは、おもいで320g、かるいで260gでした。

12月2日 (日) 晴 15度

子うさぎの毛の長さを計りました。耳の長さも計りました。耳の長さは、白と黒は5cm、ねずみ色は6cmでした。

12月4日 (火) 晴 14度

けさみたら、母うさぎと7ひきの子うさぎは、頭をそろえて、なかよくにんじんをたべていました。よいぐあいに、みんな元氣よくそだっているので、安心しました。



K160.8-1-7

國語 第四学年 上
Approved by Ministry of Education
(Date Mar. 5, 1947)

昭和二十二年三月五日 翻刻印刷
昭和二十二年三月二十日 翻刻發行
(昭和二十二年三月五日 文部省検査済)

著作権所有

著作發行者

文

部

省

翻刻發行
印刷者

東京都王子區堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式會社

代表者 井上源之丞

印刷所

東京都王子區堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式會社

發行所

東京都王子區堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式會社

廷 (79)	巢 (59)	回 (48)	曲 (41)	觀 (27)	油 (18)	庭 (4)
晴 (86)	甲 (74)	郡 (48)	老 (42)	察 (27)	橋 (19)	舍 (5)
注 (91)	乙 (74)	外 (49)	戰 (43)	轉 (29)	曜 (21)	歌 (7)
暑 (94)	短 (77)	內 (49)	失 (44)	前 (35)	兄 (22)	渡 (8)
齒 (77)	整 (50)	序 (46)	頭 (35)	砂 (23)	黃 (8)	
裁 (79)	式 (50)	縣 (46)	客 (40)	帳 (25)	卒 (9)	
判 (79)	胸 (54)	線 (46)	座 (40)	午 (26)	業 (9)	
官 (79)	室 (55)	章 (47)	席 (40)	後 (26)	腹 (14)	

國語



第四学年

中

